

## 在外大規模校における教務主任の業務について

前泰日協会学校バンコク日本人学校 教諭

北海道利尻郡利尻町立仙法志小学校 教諭 佐々木 貴

**キーワード** 在外教育施設、タイ、バンコク、教務主任、小学校

赴任校の概要 (2024年4月1日現在)

泰日協会学校バンコク日本人学校

Thai Japanese Association School

URL : <https://www.tjas.ac.th>

児童生徒数：小学部1,744人 中学部426人 合計2,170人

### 1 はじめに

バンコク日本人学校の正式名称は、泰日協会学校 (Thai Japanese Association School) であり、私が赴任したバンコク校の他にシラチャ校がある。

児童数は小学部、中学部合わせて、96学級（小学部75学級、小学部特別支援学級4学級、中学部16学級、中学部特別支援学級1学級）2,170名。教職員数179名（日本人教師159、ネイティブイングリッシュティーチャー13、タイ語教師7）という小・中併設の大規模校で、世界一大きな日本人学校である。また、歴史的にも日本人学校の中で一番古く、大正15年（1926年）に盤谷日本尋常小学校として創立されている。

職員構成としては、担任の他に校長1名、教頭3名（小学部2名、中学部1名）、教務主任4名（小学部3名、中学部1名）、生徒指導主任2名（小・中各1名）、特別支援コーディネーター2名（小・中各1名）、研究主任1名、進路指導主任1名、事務局、ディレクター（タイ人）で学校運営委員会を組織し、学年主任も11名（各学年、特支小中）おり、各学年の連絡・調整を行っている。

児童の実態として、保護者のほとんどが日本企業等の駐在員で母親のサポートが見込め、経済的にもかなり豊かである。学力も高めで落ち着いた児童生徒が多い。両親のどちらかが日本人ではない（タイ人の場合が多い）家庭もあるが、ほとんどの方が日本語の能力が高く、家庭との連携もとれる状態である。



全校始業式の様子

### 2 令和4年度 1年目(4年生担任)

#### (1) 学級担任として

13クラスあるうちの担任の1人として指導に当たる。前年度（令和3年度）まではコロナの影響を大きく受け、（前年度の10月後半からようやく登校できるようになった、という状態）令和4年度になり4月からの登校ができるようになったが、感染症対策は変わらず行われている状態であった。学校での3密の解消はもちろん、日本に比べ、タイではその当時から ATK 検査（簡易感染検査キット）が普及していたので、子どもたちは具

合の悪い場合にはすぐに自宅検査を行うことができ、職員も2週に1回通勤前に検査をして通勤することを義務付けられていた。

## (2) 学年内担当として

13クラスの担任、専科（理科・音楽・図工）、学年主任の17名で学年を組んでおり、教科や校務分掌を数名ずつで担当していた。私は算数部、情報活用部の一員として業務を担っていた。算数部では、学年における教育課程の見直し・改善、授業進度の調整、学習用具の準備等について同じ算数部の職員と業務に当たった。また、情報活用部では学年内の（児童・教師用）クロームブックの管理、学校全体でのICT教育の推進に当たった。バンコク日本人学校はコロナ禍を経て、ICT教育が急速に進み、学校運営の形態についても情報化が進んだようであった。Google Workspace for Educationを活用し、授業の中では子どもたちがスライドやジャムボードなどのツールを効果的に使えるようになっており、また、職員の連絡も（校内敷地が広いが故）チャットやスペースを日常の連絡ツールとして使用し、会議等もリンクを活用して提案を行っていた。また、施設の予約等もGoogleカレンダーを活用していた。保護者への連絡等も学年・学級のClassroomを用いて配信が多く、紙ベースでの配布はあまりない状態であった。

活用に当たって、慣れるまでは時間がかかり大変だったが、機能を知るごとに効率的であることが分かり、良い経験をすることができたと思う。

## 3 令和5年度 2年目（小学部第2教務主任）

### (1) 教務主任の役割

バンコク日本人学校は小学部に3名、中学部に1名の計4名の教務主任があり、小学部3名の業務分担としては、第1教務が1、2年担当、行事予定管理（年間・月間・週間）、校務分掌組織計画、幼少連携、新入学、教育実習、弁当業者対応、児童・職員名簿、情報活用部、施設管理委員会、第2教務が3、4年担当教務事務部会（編入・退学、関わる校務支援システム管理）始業式・終業式、ピックアップ児童下校対応、危機管理委員会、第3教務が5、6年担当、教育課程部会（教育課程作成、通知表、校外学習、現地校交流会）各教科領域連携、タイ語・英語スタッフとの連携、通学委員会となっており、私は第2教務を担当した。

### (2) 第2教務主任として

バンコク日本人学校は学期に1回編入学を受け付けるが、多い時には学期に200人前後の編入学児童生徒がおり、それに関わって各学年主任と連携しつつ校務支援システムの管理を行い、編入学書類の取り扱いや前籍校とのやり取りを行った。また、退学児童も同じように大人数となっており、教務事務部会の職員に指示を出しつつ、1年を通して学籍業務を行った感があった。

タイはそれほど治安が悪くないと思われるが、海外という特性上、子どもたちは100台以上の通学バス（大型バスや10人乗りバン）で登下校するか、保護者の送り迎えにより登下校する。私が担当していたピックアップ児童下校対応は、後者の保護者迎えによる下校児童の対応で、学校より発行された保護者（もしくは保護者が端末からSMS送信できる1日限りの送迎者用）のQRコードと児童生徒が1人ひとり持っている児童証のQRコードをパソコン上でペアリングしなければ、児童生徒がガードハウス（セコムが管理しておりそこに入出校のためのQRコードがついた



2学期編入書類（小学部のみ）

センサーがある)を通過することができない、というシステムとなっている。(つまり、身分が確かな者しか児童を連れ出せないこととなっていた)

2年目の第2教務としては、その他にも危機管理委員会として避難訓練(1回目は「不審者侵入対策」というところが日本とは違っていた)や教科書、副教材の扱いなど、多岐にわたった。

#### 4 令和6年度 3年目(小学部第3教務主任)

3年目には第3教務の職を担った。業務内容としては前述のとおりであるが、年度初めに時数の提案、基本時間割作成に苦悩した。

時数の管理として、バンコク日本人学校は標準の外国語の他に独自に全学年の13名のNET(Native English Teacher:以下NET)による英語学習、7名のタイ人教師によるタイ語学習が毎週組まれているため、文科標準時数を考えつつ独自の時数調整が必要となった。また、各学級の基本時間割作成については、小学部75学級、中学部16学級、なかよし(特別支援学級・小中で5学級)の基本時間割案を作成しなければならなかった。

中学校はもちろんのこと、小学部5・6年生についても完全教科担任制(1~4年は理・音・図の専科)となつており、さらに小学部から中学部、中学部から小学部、小学部の学年間で乗り入れする教員も多く、コマ合わせのパズルがなかなかうまくいかない状態であった(さらに体育施設や図書室、日本語教室やNET・タイ語との関係もあり、調整しなければならないものが多岐にわたった)。中学部教務と連携し、まずは中学部と、5年・6年の時間割を組みつつ、下の学年の使用施設調整や日本語教室、外国語などの割り振りを同時進行で行っていた。

時間割作成については時間割作成ソフトも使用したが、学級数45学級、教員数100人までにしか対応しないものだったため、全学年を入れることができず、まずは5・6年と中学部についてソフトで作成し、4年生以下に関わる乗り入れについては、手作業で行うという手順で行った。乗り入れを行う教員が多数いたため、何度も何度もソフトでの作成、手作業での調整を行い完成させた。始業後の2週間は「試行期間」ということで進めていったが、次々に不具合が見つかり、日々時間割の組み直しを行い、3週目終了ごろにようやく落ち着くといった状態であった。

※私が帰任する次の年度(令和7年度)には、3、4年生も教科担任制を導入予定で、次年度教務を担当する先生方で年が明けたあたりから時間割編成について相談をしていた。



手作業による年度初めの時間割編成

#### 5 おわりに

3年間の在外教育施設派遣で世界一の規模を誇るバンコク日本人学校で担任業務、教務主任としての業務を行ったことは、これまでとは違う経験することができたと思う。日本全国から様々な視野を持ったたくさんの教職員と一緒に学校教育活動に携わることができ、これまでの経験やものの見方にとらわれず、最善の方法を模索していくという意識を身に付けられたと感じる。帰国後もまた、派遣時の経験をそのまま自身の教育活動に取り入れるのではなく、その時その時に合った形で経験を活かしていけたらと思う。